

Title	1891年におけるジャン・モレアスの転向
Sub Title	La conversion de Jean Moréas en 1891
Author	立花, 史(Tachibana, Fuhito)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.77 (2023. 10) ,p.43- 56
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20231031-0043">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20231031-0043</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 1891年におけるジャン・モレアスの転向

立 花 史

はじめに

本稿では、ジャン・モレアス (Jean Moréas : 1856 ~ 1910) の目まぐるしい一年の動きを簡単に辿ることにしたい。モレアスの本名は、ヨアニス・A・パパディアマンドープロス (Ιωάννης Α. Παπαδιαμαντόπουλος) で、フランスに移民したギリシア人である。彼の祖父は、祖国ギリシアにおいて独立戦争で武勲を上げた人物で、父は政府の高官を務めていた。モレアスは、フランス語教育を受けて育ち、1875年にパリに上京した。それ以降、フランス語で詩を書くフランス詩人となった<sup>1)</sup>。

モレアスのテキストで、フランス文学史上もっとも有名なのは、1886年

---

1) モレアスの研究書としては、真っ先にフランス時代とギリシア時代のそれぞれに一冊を捧げた研究書が挙げられる。そのほか、本稿では、近年の研究として、パトリック・マギネスの著作とオリヴィエ・ビヴォールの論考を参照している。とりわけ本稿は、ビヴォールへの注釈の側面が強い。

- JOUANNY (Olivier), *Jean Moréas, écrivain français*, Lettres modernes Minard, 1969.
- JOUANNY (Olivier), *Jean Moréas, écrivain grec*, Lettres modernes, 1975.
- McGuinness (Patrick), *Poetry and Radical Politics in Fin De Siècle France*, Oxford, Oxford University Press, 2015.
- BIVORT (Olivier), « La Renaissance de l'École romane », *Le xix<sup>e</sup> siècle, lecteur du xvi<sup>e</sup> siècle*, Classiques Garnier, 2020, pp. 439–458.

にフィガロ紙の付録に掲載された、いわゆる“象徴主義宣言”だろう（ブルトンの『シュールレアリスム宣言』のように、「宣言」にはっきりと「象徴主義」という文言が付されているわけではないのでこのように表記しておく）。これによってモレアスはひとまず、文豪がひしめくこの時代に、フランスという一国の文学という一つの芸術ジャンルにとどまることのない、あの広範な象徴主義運動の名目上の祖となった。

しかし、さらに興味深いのは、1886年に象徴主義を高らかに宣言したモレアスが、5年後の1891年には、象徴主義を離脱して、ロマネ派を立ち上げたということである。すでに述べたように、象徴主義自体はたいへん広範な運動を指すのだが、宣言をしたモレアスに即して最狭義の象徴主義というものを考えるのであれば、この象徴主義は、実のところたった5年で終わっていたのである。

本稿がたどりたいのは、まさに1891年のこうした動きだ。最狭義の象徴主義の“終わりの始まり”から、ロマネ派がはっきりと保守的な文学流派として立ち上がる“始まりの終わり”までを簡単に振り返っておきたい。

## 詩集の反響

1890年12月に、モレアスは、『情熱的な巡礼者』という詩集を出した。序文では、マレルブの改革以降に変質したプレクラシックな言語と作詩法への逆説的な回帰をたたえている。年が明けた1891年1月にはさっそく、モレアスの象徴主義が『プリューム』誌によって特集されるのだが、それが、良くも悪くも、モレアスのその後を大きく変えてしまうことになる。

まずは、詩集の方から見てゆこう。すでに見たように、1886年の宣言でも、表現の自由を擁護してアンチクラシックな感情を表明していたが、今度は、新たな流派をつくって、革命を起こそうとしている。しかも、言語を豊かにすることで詩的なディスクールを刷新しようとしているのだが、その方法が、古い状態への回帰という形をとる。この辺りについて、ユレのインタビューでも答えている。

私は、詩的言語の刷新を、諸伝統への回帰を、ロマンス語の源泉に浸された文体を希求する唯一の存在です。ロマン派の語彙にしたがって私たちはあまりに長く生きて来ました！あの語彙は、それが開花した時代には、かなり味わい深いものに見えました。不運なことに、ロマン派連中の構文が凡庸だったのです。これこそが、文体上の大きな瑕疵です！あの語彙が、理性的な構文を抜きに、とにかく使いまわされ、ぼろぼろに擦り切れました！〔…〕私が復興を望む文体は、詩的表現に新たな活力をもたらすことでしょう<sup>2)</sup>。

1890年代になって、あらためてロマン派批判がなされたことが人びとを驚かせた。時代はすでに、デカダンやサンボリストがおこなった形式上の転回を経ている一方で、そもそもロマン派の方がルネサンス文化を再発見して、アルカイズムへと文学の領域を広げたのではなかったのか。非合理的なロマン派文体を批判しつつ、モレアス自身が、18世紀におおよそ確立した文体を駆使しているのも興味深い。

4月のユレのインタビューで、ユイスマンスは、モレアスのコンセプトについて、「ロマンス語でモダンなことをやるって？正気の沙汰じゃないね！」と言って切り捨てている<sup>3)</sup>。彼でなくても、そう思った人が多いだろう。この時代、形式の高度な洗練がモダンの証しであっただけに。そしてモレアス自身、そちらの陣営の古なじみであるだけに。

とりあえず、詩集の方を見てみよう。シェイクスピア風の題名を付されたこの『情熱的な巡礼者』に集められた作品に目をやると、プレクラシックな作家たちの形式やテーマを借りつつ、15世紀や16世紀の韻律法を、自由詩以降の近代人の自由奔放さとを結合しているところを垣間見ることができる。

2) ユレのインタビューへの回答。Cf. *L'Écho de Paris*, 19 mars 1891, repris dans Jules Huret, *Enquête sur l'évolution littéraire* [1891], notes et préface de Daniel Grojnowski, Vanves, Thot, éd. revue, 1984, pp. 90–91.

3) *Ibid.*, p. 164.

Thyrsis se rengorge d'une coupe ouvrée  
 Des mains du noble Alcimédon ;  
 Batte, opprobre de la montagne sacrée,  
 D'un laurier de brigue eut guerdon.  
 À toi, l'honneur des Lybéthrides agrestes,  
 Abreuvé des parlantes eaux :  
 Il ne sied prix que du son de tes doigts prestes  
 Sur les disparates roseaux,  
 Divin Tityre, âme légère! comm' houppes  
 De mimalloniques tymbons;  
 Divin Tityre, âme légère! comm' troupe  
 De satyreux ballant par bonds<sup>4)</sup>.

モレアスが、独特のアルカイズムとモダニズムの融合を主張しているとしても、この詩の文体が模倣の所産である点は否めない。モレアス研究の泰斗ロバール・ジュアニーによると、「プレイアッド派の詩人たちや他のお手本から、語彙や言い回しを借りるだけで満足せず、彼らのもつ芸術観や詩人としての誇りも採用して、パスティッシュやパラフレーズにまで至っている」と指摘せざるをえない<sup>5)</sup>。

『情熱的な巡礼者』を最初に批評した層は、モレアスの語調やテーマの、ルネサンスとりわけコンサールのそれらとの近さを目ざとく指摘している。アナトール・フランスは、1890年12月21日付の『ル・タン』紙で、『情熱的な巡礼者』の言語が、「おそろしく突飛で無礼」なことに困惑している。「文献学者で言語に関心がある」が、「優雅な術学と美しい悪趣味のロカイユ様式とデカダン詩の不穏なあいまいさが奇妙に結合している」、そうアナトールは評しつつ、「プレイアッド派が輝いていたセーヌやロワヌのほと

4) MORÉAS (Jean), « Églogue à Paul Verlaine », *Le Pèlerin passionné*, Léon Vanier, 1891, p. 4.

5) Jouanny, *ibid.*, 1969, p. 500.

りで彼がつかんだ洗練された形式の下でしか古代ギリシアの神々と懇意にしようと思まないように見える」、そういうところに惹かれたようで、アナトールはまさにこの文脈で、モレアスを「象徴主義のロンサール」と形容したのである<sup>6)</sup>。

ここで、前後関係を確認しておこう。

- 1890年 12月に1891年付で『情熱的な巡礼者』をLéon Vanierから出版
- 1890年 同月にアナトール・フランスに「象徴主義のロンサール」と評される
- 1891年 1月に『プリューム』誌 *La Plume* で「モレアスの象徴主義」特集
- 4月にユレの「文学の進化について」
- 9月13日にフィガロ紙が新流派結成予定の様子を報じる
- 9月14日にモレアスの公開書簡がフィガロ紙に掲載される
- この頃におおよそ、l'École romane が Jean Moréas と Charles Maurras (1868–1952) を中心に、Ernest Raynaud (1864–1936)、Maurice du Plessys (1864–1924)、Raymond de La Tailhède (1867–1938) らによって結成される

『情熱的な巡礼者』は1891年刊行とされるが、それは奥付であって、実際には12月に出ているのみならず、12月中に書評さえ出ている。それが、モレアスを「象徴主義のロンサール」と形容した有名な書評である。

その内容を受けて、まもなく1月1日付で『プリューム』誌が「モレアスの象徴主義」を特集した。これは、右派がモレアスを取り込んで、サンボ

6) 「ジャン・モレアス氏は、シャルル・モリス氏とシャルル・ヴィニエ氏、ローラン・タイヤード氏とともに、新たなプレリアッド派の一角である。私は彼を、象徴主義のロンサールと見ている」(Anatole France, « La poésie nouvelle. Jean Moréas : *Le Pèlerin passionné* », *Le Temps*, 21 décembre 1890)。

リストを切り崩すような形を取ったものであるため、1891年の2月以降は、サンボリストたちによるモレアス評価もきびしくなっている様子がうかがえる。したがって、上で引用したユレによるモレアスへのインタビューも、この点を考慮して見ておく必要がある。12月に出した詩集よりも1月の特集が、いっそうモレアスに、新たな路線の言語化を求めることになり、そうした中で、象徴主義のなかで思考し、マラルメと同じくロマン派の粗雑さを批判しつつ、言語の浸し直しまで語りながら、帰着点がロマンス語による詩的言語の復興という不思議なところに落ち着いているわけである。この時点では、のちに結成されるロマヌ派の方向性が見られるとしても、モレアスは、まだサンボリストとはそれほど遠くないところにいたのだ。のちに見ることになるが、ユレのインタビューから五ヶ月後に結成されるロマヌ派は、まだ春先のモレアスと、大きく変容していることだろう。

ともあれ、1891年以降、つまり『プリューム』誌でモレアスの象徴主義を特集号が出たあとでは、もはやマラルメ、ヴェルレーヌの陣営の者たちにモレアスが好意的に受け止められる可能性はほぼなかった。『独立評論』誌は、サンボリスト側で、理論的にも戦略的にも反モレアスで、彼の文体の手堅さに疑念の目を向けた。

第一に、オリジナリティの欠如が指摘される。ルネ・ギルは「これらは、ロンサル風小作品の連なりだ」と評した<sup>7)</sup>。ジョルジュ・ボナムールは、マイナー詩人ながら、手厳しく、「彼の作品からすると、彼は、第一に、バルナスをパスティッシュしていた生徒であり、次にヴェルレーヌのもとでそれをやり、今は神々しいロンサルのもとでそれをやっている。以上から、現代の詩人たちのあいだで、彼は二流の地位を得る権利を有するに十分である」と、決定的な評価を下している<sup>8)</sup>。なお、アンリ・フーキエのように伝

7) « Ronsard est pour M. Moréas, le seul poète, d'ailleurs ! » (René Ghil, « Du Pèlerin passionné », *La Revue indépendante*, février 1891, p. 148, cité par Olivier Bivort).

8) George Bonnamour, « La jeunesse littéraire. A propos de récents manifestes », *ibid.*, p. 163 (cité par Olivier Bivort).

統主義者の方も、古典の擁護者として、モレアスの過剰なロンサール風味に反発していた<sup>9)</sup>。

### 詩集のナショナリズムとヘイトスピーチ

この詩集に対しては、各方面から辛口な表現が飛んでいる。フランス国内でプレイアッド派の詩人を参照することのむずかしさを物語っている。ギリシア出身のフランス作家が、人文主義者たちのヘレニズムに魅了されている、という風に考えると、そこに何のひっかかりもないが、モレアスがルネサンスを口にする時、彼が自分に設定したパースペクティブのなかでは根拠がないわけではない。詩集の序文でこう述べている。

たしかにロマン主義の反乱は、追放された多くの語のせいで衰弱していた語彙をよみがえらせた。しかし、そもそもあの賞賛すべきロマン派たちは、大抵、支離滅裂な構文、言うなれば民族なき〔sans race〕構文を使うという罪を犯したのではなかったか<sup>10)</sup>。

モレアスの注意を引いたのは、ルネサンスの言語政策というもう一面で、それは、ラテン語と対比した意味での「俗語」つまりフランス語の発展と、それによるナショナルアイデンティティの高まりとが念頭に置かれている。言語の浸し直しは、マラルメも使う言葉だが、モレアスの場合、16世紀やそれ以前の言語に浸しなおすことによって、ナショナルアイデンティティも刷新できるのではないかという考えが、『情熱的な巡礼者』の序文の行間には表れていて、それが、民族なきロマン派への批判として語られている<sup>11)</sup>。

さて、1871年の敗北と1880年代末のブーランジスム以降、民族の問題

9) Scaramouche [Henry Fouquier], « Les nouveaux poètes », *Le Gaulois*, 3 février 1891 (cité par Olivier Bivort).

10) Moréas, op. cit., p. III.

11) あとで見ると、ここでの race は現代における「人種」とは完全に同一ではないので、ひとまず民族と訳しておく。



や言語の特質の問題がアクチュアルなものとなり、古典主義の伝統につながらないものには、反フランスの疑いがかけられる傾向が存在していた。モレアスの“変節”はこうした状況に対する応答ではあるが、しかしそれが、モレアスが応答しうる状況だったのかどうかあやしい。

以下では、ナショナリストの保守論壇の感じの悪い発言を拾ってゆきたい。デカダンについて総括するエドゥアール・ロッドは、ブリュンチエールを引き合いに出しながら、ガリア精神をおびやかす外国人とコスボモリティズムをあげつらっていた。デカダンは「フランスにとって異質＝異国のもの」で、「コスモポリティズムの発達がガリア精神の消滅を〔引き起こした〕」。ロッドはさらに続ける。「ヴェルレーヌ氏のもっとも有名な代理人で、『フィガロ』紙でセンセーショナルな宣言を公刊して大義のために格闘する御仁、モレアス氏はギリシア人。テオドール・ド・ヴィゼヴァ氏は〔…〕ポーランド人。スタニスラス・ド・ガイタもポーランド人〔…〕。ベルギー人が多い。スイス人が、マティアス・モラルとシャルル・ヴィニエ、二人いる〔…〕」<sup>12)</sup>。

エレディアも、ユレのインタビューのなかで、フランスにおける排外的な言説に乗りつつ、自分の出自についてはなかなか苦しい言い訳をしている。「かなりおどろいて指摘するのだが、フランス詩を刷新したがっているのが、ベルギー人たち、スイス人たち、ギリシア人たち、英国人たち、アメリカ人たちなのだ」。「私がスペイン人なのは確かだが、しかしラテン人だ〔…〕」<sup>13)</sup>。高踏派の系譜の詩人アルマン・シルヴェストルは、「モレアスは、愛すべきギリシア詩人だが、一民族の本来の活力が彼の詩に存するがゆえに、私は彼をフランス詩人だと見なしていない」と述べている<sup>14)</sup>。

ここで、もう一度、『情熱的な巡礼者』の序文を読んでおくと、基本的な

12) Édouard Rod, « Paul Verlaine et les décadents », *La Bibliothèque universelle et revue suisse*, novembre 1888, repris dans *Verlaine*, éd. Olivier Bivort, Paris, Presses de l'Université de Paris-Sorbonne, « Mémoire de la critique », 1997, pp. 200–201 (cité par Olivier Bivort).

13) *Enquête sur l'évolution littéraire*, op. cit., p. 259.

14) *Ibid.*, p. 271.

コンセプトは、象徴主義宣言のころとあまり変わっていない。自由詩関係の記述はなくなり、彼自身の試みは、中世から16世紀の試みから、新たな詩を生み出そうとする。筆者は、このような立場を、「サンボリスト右派」と呼びたい気持ちに駆られる。サンボリストのなかでも、前衛的な方向に振れるというより、プレクラシックな韻律法や詩形を研究して、新たな作品を生み出すような方向性を示している。またこの立場によって、象徴主義宣言で手ごたえをつかんだような、幅広い層に好まれる、コスモポリタンなサンボリストにも、ナショナリストの保守文壇にも嫌われないような、フランスの国民詩人を生み出しうる中道路線としての象徴主義を、モレアスは夢見ていたのかもしれない。

しかし、問題は大きく二点ある。一つは、ロマン主義の数々の試みがなされ、フランスの詩の最先端が非常に洗練されたものになっている時代に、プレクラシックなフランス語から新しく独自のフランス詩を打ち立てるとするのは、やはりモレアスにかぎらず、無理難題だった、目標設定が高すぎたのではないかという点である。

もう一つは、1890年代の政治状況である。この時代には、コスモポリタンな側を左派と呼び、排外的な保守論壇の側を右派と呼ぶなら、もはや左派と右派の分断はたいへん大きく、中道に立つことがたいへんむずかかった時代だ。案の定、『情熱的な巡礼者』は、出版早々に、右派の強い磁場に巻き込まれてしまう。

### モーラスが引きなおした分断線

ここで、もう一度、時系列を確認しておこう。1890年12月に、『情熱的な巡礼者』が刊行され、12月下旬にはアナトール・フランスの書評も出た。その後、1891年1月1日付で、『プリューム』誌が「モレアスの象徴主義」を特集した。これは、右派がモレアスを取り込んで、サンボリストを切り崩すような形を取ったものであるため、1891年の2月以降は、サンボリストたちによるモレアス評価もきびしくなってしまう。この詩集の評価に関しては、その辺りを差し引いて考える必要がある。『プリューム』誌のこの特集

号には、アナトール・フランスのほか、モーリス・バレス、アシル・ドゥラロッシュ、モーリス・デュ・プレシスが名前を連ねている。このとき、モーラスはまだここに加わっていなかった。

この特集号は、彼の新刊である『情熱的な巡礼者』を推薦するにとどまらず、彼がまだつながりのあるデカダンやサンボリストをよそに、イデオロギー的な原理を発信して、モレアスの作品を中心に一つの流れを作ろうと画策している。

バレスは、サンボリスト批判にモレアスを利用してほめちぎる。「私たちの友は、彼の才能によってフランス人となっているのだが、近代ギリシアがまじった民族、彼の才能が彼をフランス人に行っているのだが、アテナイで生まれ、近代ギリシアのいろいろ入り混じって官能的で優雅で精力的なこの民族から生まれた」と民族問題も擁護する。そして、モレアスがはっきりと言明したとは思えない「新流派」のことをほのめかしている<sup>15)</sup>。

デュ・プレシスは、モレアスの作品を持ち上げつつも、思想面を、大幅にゆがめている。モレアスが、フランスの詩を再建するという意味で用いていたロマン主義の「民族なき」とされた部分に対する批判は、ゲルマン文化に対する復讐心に満ちた排外主義へと書き換えられ、モレアスが、古典主義の規範からの自由として取り上げたルネサンスは、「ガリア的連続」の名の下に、17世紀や18世紀の文学も許容する古典主義に書き換えられていった<sup>16)</sup>。

オリヴィエ・ビヴォールは、『プリューム』誌が、モレアスのネオサンボリストな企てに、イデオロギー的側面を与えることに貢献したというが<sup>17)</sup>、筆者にはそうは思えず、これはモレアス自身が持っていたものではないので、モレアスの詩学が、保守的なイデオロギーに塗り固められてしまったという弊害の方が大きいと言わざるを得ない。そしてこのイデオロギーの部分が次第に優勢になってゆくことになるが、それを先導したのが、遅れてこの陣営に加わったシャルル・モーラスである。

15) BARRÉS (Maurice), *La Plume*, 1<sup>er</sup> janvier 1891, p. 13.

16) DU PLESSYS (Maurice), *ibid.*, p. 10.

17) Bivort, *op. cit.*, p. 449.

モーラスは、1868年生まれの若い世代で、1885年に17歳でプロヴァンスからパリに来た、プロヴァンス方言で創作するフェリブリージュ派の一員だ。サンボリストやデカダンに懐疑的で、この同じ1891年に、当時23歳のときに、モレアスの『情熱的な巡礼者』を論じることに捧げられた本（タイトルはそのまま『ジャン・モレアス』）を、処女作として出版している<sup>18)</sup>。

モーラスは、ギリシア＝ローマの純粋性の継承者ということで、プロヴァンス詩とモレアスの詩を結びつけて、ローマ文学の名のもとに、反ロマン主義陣営にとって理想的な人脈を構築している。

ラテン人、フェリブリージュ人、ヘレニア人、それは同じものだ。ジャン・モレアスは、この数ヶ月、それを「ローマ」と呼びたがっていて、私は、その名を聴いて感動せずにはいられなかった。そのとき、『巡礼者』のページにあるような、

生まれた土地の振動

に気づいた。「ローマ」文学を欲することは、実際、ロマン派たちが犯した唯一の誤りと、きっぱり手を切ることである<sup>19)</sup>。

そうやって、モーラスは、味方と敵を、出自によって振り分けてゆく。

アテナイの書物が発売されて四時間後、『コリントの婚礼』や『ルコエ』の著者であるアナトール・フランス氏は、ジャン・モレアスを世に知らしめて、連載作家たちを仰天させた。アナトール・フランス氏が純粋なアッティカ人だと私たちが知ったのはかなり昔だ。モーリス・パレスは、その名が出自を告げているとおり、半分スペイン人で半分ヴェネ

18) MAURRAS (Charles), *Jean Moréas*, Plon, 1891.

19) MAURRAS (Charles), « Barbares et Romains », *La Plume*, 1<sup>er</sup> juillet 1891, p. 229.

ツィア人だが、まずもってローマ人で、すぐさまフランス氏に加わった。レイモン・ドゥ・ラ・タイエード氏は、その陶然とした異教がフリギアの神々をギリシア化したローマの勝利の道へと案内させるのだが、彼はピンダロスの響きを持つオードで、モレアス氏の十行の詩句に応答した。モーリス・デュ・プレシスは、パリジャンで、記憶のなかのまったき古典人だが、サンボリストたちの宴で『アポロドールへの献辞』を読み上げた。

[…]

しかし、かくも純粋な本質による芸術は […] さっそく野蛮人たちのどよめきを掻き立てた。スキタイ人のマリー・クリシンスカ夫人は、その奇妙な想像力を私は高く買っているのだが、彼女が初めてオルフェウスの首を所望したのは賞賛すべきではないか。次に、サントナージュに育まれ、ただしベルギーで生まれたギル氏。ギル氏の後には、もう一人のベルギー人、ロダンバック氏。次に、ヘルベティア人のヴィニエ氏、タルタル人のジュディット・ゴーティエ嬢、そして最後に、ホメロスなら生まれることのありえなかった地、オランダで暮らした、ジョリス＝カルル・ユイスマンズ氏<sup>20)</sup>。

こうして、フィガロ紙での宣言の5年後、同じくフィガロ紙は、同年1891年9月13日に、「新流派」と題して、モレアスの新しい文学流派の創設が近いことを報じた。するとその機会を利用して、モレアスは公開書簡を送り、自分の流派を宣伝している。そこには、さりげなく17世紀のラシーヌとラ・フォンテーヌが入っているのが見える。ロンサルよりラシーヌを好むモレアスの影響が、モレアスにも完全に及んでしまったように見受けられる。

フランス・ロマヌ派が引き受けるのは、ギリシア＝ラテンの原理で、

---

20) MAURRAS, op. cit., p. 230.

これは、トルヴェールとともに11世紀、12世紀、13世紀に、ロンサールとその流派とともに16世紀に、ラシーヌやラ・フォンテーヌとともに17世紀に開花したフランス文芸の根本原理である。〔…〕ロマン主義こそが、その着想の点でも文体の点でも、この原理を変質させ、その正当な遺産であるフランスのムーサイたちを失望させた<sup>21)</sup>。

これ以降、ロマヌ派の攻撃対象は、19世紀のロマン主義以降の文学に向けられることになる。こうして、ロマンス語による文芸復興をかかげたモレアスのプロジェクトは、数ヶ月後には、保守的な新古典主義に変容してしまった。そして、新ブレイアッド・シリーズの絵柄は、兜をかぶったミネルヴァという古典主義的なものになった。

おしまいに

ロマヌ派の他の作家たちも、しばらくはロンサールの名を挙げ続けるが、次第に16世紀文学への参照が減ってゆく。モレアス自身、1893年の『情熱的な巡礼者』の第二版の序文では、現在では不要として、初版の序文を削除していて、ロンサールは参照すべき過去の詩人たちの一人、ルネサンス詩は参照すべき過去の文学の一部にすぎなくなってしまった。

さらに数年後の1899年、モレアスは、『スタンス』第一巻を出版する。こちらは、古典主義的な平明な文体によって書かれた詩だ。そのため、彼の軌跡は、高踏派や象徴主義からロマヌ派へ、ロマヌ派から、17世紀と18世紀に軸足を置いた新古典主義へという移行を、作品の上でも完全に遂げていった。チボーデによると、モレアスは、外からフランス人になった者であるがゆえに、ローマの文献学への衝動によって、自然と、言語や文法の問いを抱き、古いフランス作家たちへと向かった。モダニスト期のあと、少し不自然な「ローマ」期を経て、彼の本性に合った古典主義へと行きついたが、それは300年前に、偉大な世紀の詩へと向かったフランス文学史の歩

---

21) *Le Figaro*, 14 septembre 1891, dans la rubrique « Les échos ».

みでもある。かくして『情熱的な巡礼者』の作者は『スタンス』の作者になった<sup>22)</sup>。「フランス詩こそが、ロンサールからマレルブに至った」<sup>23)</sup>ように。ただし逆説的なことに、末期の象徴主義を再活性化するべく召喚されたのがロンサールで、次に彼は、その詩学にもかかわらず、古典主義の番人となった。1913年にチボーデはそう書いている。こうしてみると、モレアスが、象徴主義の宣言に書いていた歴史観、過去への回帰をとまなう進化は、皮肉にも、象徴主義そのものよりむしろ、モレアス自身のキャリアを予言するものであったように見えるのが、なんとも皮肉なことだ。

しかしチボーデが提示して、オリヴィエ・ビヴォールが追認したこの見方は、モレアスが価値を置く詩形の話にしかなくなっているのだろうか。作品のなかに現れる思想はもう少し、別の側面が見て取れるかと思われるので、今後の論考でそれを示していこうと思う。

---

22) THIBAUDET (Albert), « Hécate aux trois visages », *Hommage à Moréas pour le dixième anniversaire de sa mort, La Revue critique des idées et des livres*, no. 161, 25 mars 1920, p. 685.

23) *Ibid.*, p. 687.